

光と影の消去人（ディリ ーター） 第二話

K-西松

「ふう・・・。」

教皇エトフォル14世は、自室のバルコニーに出て、夜風に当たっていた。

エザリアの成人の日が近づくにつれ、王国派の活動が日増しに増長していくのがわかる。執政権が教会にあるのは、エザリアが幼く、政治が行えないという理由からであった。つまり、エザリアが成人してしまえば、政権はエザリアに返さなくてはならなくなる。

「やっかいなものですね・・・人、とは・・・。」

「ロイか・・・。」

自分の背後に立つ男を気にすることもなく、教皇は街を見下ろす。

「依頼した人間は消したのだな？」

「抜かりはありません。」

自分が寝ていたこと以外は、というのは報告しないことにした。

うかつだった。意識を取り戻したときには、リオンもヴェルノも戻ってきていたのだ。

今、ロイの眼下には、町が広がっている。

ほとんど明かりはついていない。

ふと、ロイの脳裏に疑問が浮かぶ。

君は、この町のどこかにいるのだろうか？

今、君は何をしているのだろうか？

スピカ・ハロウィ・ティンクル。ロイが捜して求めている人物であった。

「君が、ロイ・スティレット？」

鈴の音がした。

そして振り向くと、目の前に、青い、くりっとした大きな瞳が見える。

「よろしくね、新入りさん？」

声の主は女性だった。

金髪で毛先がナチュラルにカールし、頭の赤いリボンが印象的だった。

「ちょっと！話聞いているの？」

お姉さん属性なのか、うるさい。だが、不思議と嫌ではなかった。

「まったく・・・そなんじゃ先が思いやられるな・・・。ちゃんとスティレットは使えるんですか？使えないなら、お姉さんが、おしえてあげる□」

「うるさいな。」

ロイは明らかに迷惑そうに答えた。

「なんだと～先輩に向かって！お前なんか消すぞ？」

言葉とは裏腹に、頬を、ぷうっと膨らませて上目遣いで抗議する彼女を先輩とは思えなかった。

「なんか用か？」

「だ～か～ら～君がロイ・スティレットかって聞いているんだけど？」

「そうだ。聞かなくてもわかるだろ？武器を見れば。」

そう言って、ロイは腰に携えた二本の剣を見せる。

「あらそう？それじゃあ、私が誰だかわかるのかな？ロイ君。」

「・・・・・・・・。」

「うふふふふふ。」

楽しげに笑う女。

ロイは頭から足の先まで一瞥する。

レザーブーツに、白いひらひらのスカート。

背中側の腰の辺りには、赤い大きなリボン。

少し胸元の開いた服。

「わかった。お前が誰か。」

「へ〜。誰？」

「お前は・・・・・・・・。」

「私は・・・・・・・・？」

「・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・。」

「バカだ。」

「・・・・・・・・・・・・？」

「バカだといったんだが？」

「な・・・・・・・・なんですってええええええ！」

周辺一帯に声がこだました。

「うるさいな。」

「あ、あ、あ、あなた！私のどこがバカだって言うのよ！」

「まずその格好だ。」

女は大きな目をぱちくりさせる。

「格好！？このセクシーかつキュートさを持つ服装に文句があるの？」

「お前、我々の仕事が終わっているのか？そんな高いヒールの靴を履いていれば、戦闘になったときに転ぶし、移動速度も落ちる。次に、スカート。足へのダメージを守ってくれるものではない。そのリボンは何のためにあるのかすら理解できない。的になりたいのか？まして、白は夜に目立ちすぎる。それと、胸元が開きすぎだ。色仕掛けを仕掛けるのなら話は別だが、戦闘中にお前の胸の谷間を見て、手を止めてくれるバカはいない。」

「あららら・・・・・・・・やらしいわね、ロイ君。私のグランドキャニオンを見るなんて？今まで何人もがこの胸の餌食になってきたのよ・・・・・・・・あなたも餌食になる？」

「くだらないな。ディリターに色仕掛けなんぞが通用するわけがない。」

「それはどうかしらね・・・・・・・・あなたの知らないことなんてこの世界にはたくさんあるのよ？」

」

「残念だが、俺の知らないことはない。特にこの世界に関してはな・・・・・・・・。」

「そう。なら、聞いわ。ずばり！私の3サイズはいくつでしようか？」

「ふう・・・・・・・・。」

ロイは大きくため息をつく、女の体を見る。

「・・・・・・・・上から93, 45, 80。カップはGってどこか。ちなみに身長は160cm、体重は・・・・・・・・。」

「ストップ！そこまで！体重は言わなくていいの！それにしても、すべてがぴったりにね・・・・・・・・。」

女はあきれたように言った。

普段のヴェルノは、物事を冷静に考え、はっきりとものを言う子である。

「どうかしたか？」

「隊長！」

大声を上げて入ってきたのはリオンだった。

「隊長！あれほどデファイブレンドには気をつけろ、って言っただろ？」

リオンもほっとした表情を浮かべていた。

「そうだったな。お前が飲んだ後にしか飲むなと言われていたな。」

「そうだよ！もし、隊長が死んだらどうすんだよ？」

「そうだな・・・。」

今まで考えたこともないことだから、ロイは考えてみることにした。

「あまりいい結果にはならなさそうだな。」

「冷静に考えてる場合か！」

「ははは、わかったな。デファイ！ヘーゲル！」

ロイは張本人に会うべく、部屋を出た。

「ヴェルノ、話をしてないだろうな？」

「う・・・うん・・・。」

「いいか、話すんじゃないぞ？」

「わかってる・・・。」

「あんな子供じゃ何もできやしないって。」

「う、うん。」

「大丈夫だ！いくぞ？」

「・・・。」

ヴェルノはうつむいたまま、リオンの後を追った。

「ぐ・・・。。。。。。。た・・・助けてくれ・・・娘、が・・・娘が一人・・・。」

目の前には中年のひげ面の男が命乞いをしていた。

リオンとヴェルノにとって、初の単独の仕事。

通常ディリーターの見習いは、ロイ達と共に行動する。そしてある程度認められると、単独での行動を許可される。単独といっても、基本一人で行動することはほとんどない。

「残念だけど、無理。」

リオンは愛用のムチ、ティリーレー振りで、男の息の根を止めた。

「任務完了だな。ヴェルノ、帰還するぞ。」

「ええ。」

ヴェルノは周囲を確認すると、男の死体を回収させる。

「目撃者なし、任務完了っと。楽勝だな！」

「調子に乗らないの。さっさと帰るわよ！」

「へいへい。」

リオンは物足りなさを感じつつも、任務をやり遂げたという充実感に満たされていた。

「・・・誰だ？」

ティリーレがうなりを上げ、壁際にあったクローゼットの扉を破壊する。

「子供？」

中から出てきたのは、小さな女の子だった。

「お……お父さん？」

震える声でそうつぶやく。

「……悪く思うな……。」

リオンは、女の子めがけてティリーレを振るう。

「リオン！」

ムチの先が、女の子をとらえるかとらえないかのぎりぎりのところで、何かに絡め取られた。

「ヴェルノ？ どういうつもりだ？」

よく見ると、ムチを絡め取っているのは細い糸であった。ヴェルノの暗器、アンセスである。

「お願い……この子を……見逃してあげて……。」

「なに言ってんだ？ どうかしたのか？」

「お願い……。」

ヴェルノの肩は細かく震えていた。

「どうしたんだ？何かあったのか？子供だからって、関係ないだろ？」

「おねがだから……。この子は……。だめ……。」

小さな声で懇願するヴェルノは、リオンが知っているヴェルノではなかった。

「……。わかったよ。」

「え？」

「わかったよ。どうせこんな小さな子供だ。何もできやしないだろ？」

「いいの？」

「ああ。ただし隊長には内緒だ。仮にもしこいつがなんかやったら、その時はわかっているな？」

「うん。」

少しだけヴェルノの表情がよくなった。

「いくぞ。」

「うん！」

二人はその家を後にした。

「ロイ。」

「は……。」

「王国派は、エザリアの成人の儀と共に、政権を奪いに来るであろうな。」

「まちがないでしょうね。あの方は、現状に満足していない。我々の裏での行動も気がついている。」

エザリアが成人の儀を終えれば、政権の奪還は容易である。

実質、今まで国王が政治を行ってきたのだ。

現状としては、エザリアが幼いから、代わりに教会が執り行うとしてあるのだ。

「それを止めねばならぬ。やっとなつかんだ我々の時代なのだ。」

「ええ。そのためならば、我々はどのような者でも、消して差し上げます。」

「うむ。それでは、例の計画を頼むぞ……。」

「はっ……。正面から叩かねば、民衆は認めませんからね。」

外からノックの音がした。

「ベイガルドです。」

「ゲフェスキーです。」

「はいれ。」

扉が開き、ベイガルドと赤い髪の優男が入ってきた。

「ご機嫌麗しゅうございます、教皇様。」

優男、ゲフェスキーが頭を垂れる。

ゲフェスキーは、諜報部、メトエレの隊長であると同時に、狂信者中の狂信者である。

「うむ。ゲフェスキーよ、こちらへ来てくれ。」

「は……。」

ゲフェスキーの足音が近づいてくる。

「これは、これは……。ロイ様ではありませんか？」

「ああ。」

明らかな不満顔をロイにむけてくる。

教皇に信頼されているロイが憎いのだ。

「ゲフェスキーよ、最近王国派の動きがかなり激しくなっているが、どうだ？」

「そうですね……。確かに成人の儀が近づいているのでかなり激しくなっていますね。最近では、ディリーターに関する重要参考人を手に入れたとか。」

(なんだと！？そんなばかな……。いつだ……。それともこいつのはったりか……。)

ロイは平静を装い、表情を崩さない。

「ロイ、事実か？」

「私には報告は来ておりません。ですが、早急に調べます。真実ならばね。」

「わかった。お前らの存在は、公式に認められてはいけないことだ。」

「心得ております。」

ディリーターは、一般的に存在を認識されている。だが、所属、目的、構成員等はすべて極秘となっている。

それ故、民衆の間には、エリ・メアの怒りともとられれば、エリ・メア教団にたてつく者を排除するという話も出ている。

「メトエレはどうするんだ？」

横から見ていたベイガルドが口を挟んだ。

「ベイガルド様、私は今、教皇様と話しているのです。横から口を挟むなんて、無粋なまねはしないでいただきたい。」

「……………」

「ゲフェスキー、ベイガルドの質問に答えよ。」

「は。基本的にはミシリア・エマをマークしたいのですが、なかなか奴には近づけませんね。」

」

「ベレトレ、か？」

「よくご存じで、さすがは教皇様。」

「ロイが教えてくれたのだよ。」

「そうですか……………」

横目でロイをにらむ。

ロイはいい顔で笑っていた。

「ベレトレによって、ミシリア・エマの監視はうまくいっておりません。他の者達もなかなか難しい状態です。まあ、ディリーターが消しすぎている気もしますが……………」

「そうか……………ロイ、例の話を。」

「は……………。この間、消した人間が死の間際に話していたのですが、来週、王国派の大規模な会議があるそうですよ？」

「そ、そうですか……………」

「まあ、諜報部であるメトエレですから当然知っているとは思いますがね。」

「ええ！もちろん知っていますとも！」

「内容に関しては、成人の儀の前にある、定期議会への対策でしょうね。場所は、ディエルタ大聖堂エスカリーナ教会でよかったですかな？ゲフェスキー殿。」

「もももちろんですよ！当然知っていますとも。」

あたかも知っていたかのように、ゲフェスキーは繕う。

「さすがですね。すでに部隊の手配は？やはり、かなり重要な会議ですからね。それなりの戦力でいくのでしょうか？侵入がばれれば戦闘になりますし。」

「当たり前ですよ。部隊の編成も完了しております。抜かりはありませんよ。」

平静を保ちながらも、動揺しているのが丸見えであった。

「さすがだな。」

「ありがとうございます、教皇様。」

ゲフェスキーは恍惚の表情で教皇を見る。

「教皇様。」

「なんだ、ロイ。」

「はっ。差し出がましいようですが、私の部下を数人同行させていただきたいのですが？」

「それには及びません。私の部下とて、優秀な者達ばかりですので。」

「私が心配しているのは、もし何かが起きて、戦闘になったときです。メトエレは基本的に諜報活動がメインですので。戦闘には向いていません。ですが我々ならば、戦闘も、諜報活動も邪魔にはならないでしょう。」

教皇は思案した後、ゲフェスキーを見る。

「どうだ、ゲフェスキー？」

「・・・わかりました。できるだけ少人数でお願いします。」

「ロイ、メンバーを構成し、準備にかかれ。」

「は。」

「それでは、私もさらに、もう一度、深く、考えねばなりませんので、失礼します。」

ゲフェスキーは向きを変えると、扉から出て行った。

「まったく・・・何であれがメトエレの隊長なんだか・・・。」

ベイガルドは、足音が遠ざかったのを確認した後、ため息混じりに吐き捨てた。

「事実、諜報部が負けているからこそ、我々ディリーターの出番が多すぎるのですよ。」

「そういうな、ロイ、ベイガルド。それを知っているから、王国派はそこをついてくるんだ。そして、そこが我々の狙いでもある。今回の計画で、すべてを思い知らせてやろう。」

「御意・・・。」

「は・・・。」

エルトは今、これまでの自分の人生でもっとも自分に不釣り合いな場所にいた。

床には赤い絨毯が敷かれ、柱には曇り一つない。

その場は、厳粛さと、静寂が支配される場所。

「エザリア様。」

「あら、ミシリアではないですか。」

「はっ、姫・・・。朝の謁見に参りました。」

「王の間かよ・・・。」

エルトは、隣を見る。

いつもならそこに無精ひげを生やしたおっさんがいるのだが、今はいない。

「誰が！おっさんだああああ！」

自分の部屋にいたオルベルティが叫んだが、たいした問題ではないので、話を戻すことにする

。

(オルベルティの野郎・・・こういう理由で今日は休みやがったのか。)

ここにはいないおっさんがいい顔で笑っているのを想像するのは容易かった。

「ミシリア、その方は？」

紫の瞳がエルトの姿を映す。

「はい、エルト・レットィという者です。近日、参考人として保護し、今は私の部下として訓練中です。」

「そうですか。初めまして。エザリアです。」

優しくほほえみかけられるが、エルトはどう返せばいいかわからなかった。

(くだらないこと言ったら打ち首になったりするのか？)

「エルト・レットィです。宜しくお願いします。」

とりあえず無難に交わすことにした。

「ベレトレ、エルトの挨拶も終わったから、先に戻ってて。」

「は。」

ベレトレは、エザリアに一礼すると、立ち上がる。

エルトもそれにならい、立ち去る。

二人の姿を見送ってから、エザリアはミシリアを呼ぶ。

「エルト、といったわね。大丈夫かしら？」

「今のところはなにも。常に監視をつけているので、仮にもしメトエレだとしても何もできないかと。」

「そう。それならいいけど。例の青い髪の少年と赤い髪の捜索は？」

「未だに・・・。それらしい者の目星はつけていますが、なにぶん情報が少なすぎて。」

「そう・・・。でも、大きな一歩ね。とにかく、その少年を早急に見つけ出し、ディリーターが、エリ・メア教団所属の組織とすることを公表できれば、民衆を味方につける。」

「今まで手にいれた証拠も、教団とのつながりを証明できるものではないですからね。」

「ええ。過剰な寄付金、それに伴う商業利益の還元。民の生活規範であるエリ・メア教典の書き換え。教団の秘密に近づく者は皆、消えた。この状況は許しておく訳にはいかない。」

エザリアは、拳を強く握りしめる。

「お気持ち、お察しいたします。ですが、今は慎重に進めるべきです。とりあえず、次の定期議会の対策会議を。その場に、証人も同行させます。まだ今回の議会は勝負所ではありませんからね。」

憤るエザリアをなだめるようにミシリアは言葉を紡ぎ出す。

「わかっているわ。ミシリア、とりあえず少年の特定を急がせて。」

「はっ。」

ミシリアは一礼すると、向きを変え扉から出て行った。

「父様・・・。」

エザリアは首にかけられたロケットのふたを開く。

そこには前国王と、幼きエザリアが写っていた。

「必ず・・・取り戻して見せます・・・。この国を・・・。」

「いや～肩がこったなあ。」

エルトは背伸びしながら、ベレトレと肩を並べて歩いていた。

「ふふふ、確かになれないと疲れますね。」

「ベレトレもそうだったのか？」

「最初はそうでしたよ。何せ、いきなり姫様に会わされるわけですからね。ですが、皆そうですよ？」

「全員やるのか？」

「一応しきたりです。」

「おっさん、あんたもやったのか？」

「だれがああああああああああああ！」

突然、目の前の扉が吹き飛ぶ。

「おっさんだあああああ！」

「いい加減この展開も飽きてきたな・・・。」

「あん？」

「でも、探す手間が省けていいですよね。」

「そういわれればそうだな。」

エルトとベレトレは、オルベルティの顔を見る。

「あんだよ？」

「いや、あんたも会ったのか？」

「俺は会ってないぜ？ああいう空気はきつい。」

「へ～。」

とりあえず、ミシリアが戻るまでカフェにいることにした。

「どうですか、騎士団は？」

「ん？まあ、なれてきたところ。実際、オルベルティとの訓練ばかりだからあまり実感ないけど、楽しいもんだよ。いつも退屈と戦ってたからね。」

「ベレトレ、なかなかこいつ使えるようになってきたぜ。しかも、なんか変な癖がある剣だから、結構やりづらいもんだ。」

「ほう・・・それならいつか手合わせしてみたいものですね。」

フッフ、と笑って紅茶を飲むベレトレには余裕が感じられた。

「言ってくれたな？今すぐやってやろうじゃないか！」

「やめとけ。」

やる気満々のエルトを制止したのはオルベルティだった。

いつになく真面目な顔をしている。

「なんだよ？」

「ベレトレとやるにはまだ早すぎる。」

オルベルティの真顔に、言葉が消える。

「まあ、あんたが言うなら、そうなんだろうな。でも、いつか超えてやるぜ？」

「フッフ、楽しみですね。それはそうと、エルト。今まで、街ではどうしていたんですか？」

「住まいは、ぼろぼろの空き家の屋根裏に住んでたな。いわゆる不法滞在って奴。あ、もしかして、これって捕まったりするの？」

「そんなことはないですよ。」

「そっか。んで、仕事は、朝は、教会の掃除で、昼前にはレストランの下ごしらえして、昼か

らは建物とかの修復して、夜はバーでバイトみたいな。」

エルトは軽く言い放った。

「それは・・・過酷ですね。」

「あ？んでも仕事もらえた分よかったよ。ないやつだっていたしね。俺なんてまだいい方だからな。」

「……。」

「……。」

「あれ？俺なんか言ったか？」

三人の間に気まずい空気が訪れ、沈黙が支配する。

「あら？都合のいいことに3人ともいるわね？」

顔を上げると、ミシリアがいた。

「さてと、エルト。初任務よ？といってもオルベルティと一緒にだけだね。」

ミシリアはテーブルに着くと、真剣な面持ちで話し始める。

「定期議会对策会議の際、重要参考人の情報を披露する。」

「それでは、参考人の命が……。」

ベレトレの意見は当然である。王国派がディリターに関する情報を持った人間を保護しているとなれば、必ず奴らが現れる。

「ええ。来ざるを得ないわ。」

「……そうか？」

異を唱えたのはエルトだった。

「参考人が子供だとわかれば、民衆だって信じやしない。もし、青い髪と赤い髪の子を見つけて、なおかつ捕獲できれば信じられるかもしれないが……。ディリターだって何人いるかわからないんだろ？だとすれば、捕獲したのが本物かも証明できない。それだけの逃げの理由があるにもかかわらず、敵陣に飛び込むとは思えないが？」

エルトの指摘はもっともだった。あの子の言うことを信じられるのか、民衆は信じて立ち上がるのか。

可能性としてはかなり低いと置いていい。下手すれば、でっち上げとして王国派が叩かれる可能性だってある。そうすれば復権は不可能に近づく。

「エルトの言うことはもっともよ。だからといって、完全に無視することはできない。まして、相手は子供かどうかもわからないのよ？」

「となると、確認のために出てくるのは、メトエレか……。」

今まで沈黙を貫いてきたオルベルティが言った。

「エリ・メア教団の言い分としては、ディリターは危険だが、メトエレなら問題ない。奴らは、世間的にも知られている。所属もはっきりしている。仮に、民衆に知られたとしても、王国派の不穏な動きを探っていた、で終わるな。」

「ええ。間違いなくメトエレが出てくるわ。今回の目的はメトエレを叩く。そのためには、本物の参考人がいなければ、奴らは信じない。」

「子供でもか？」

「エルト、エリ・メア教団と我々を対比した場合、大半はエリ・メア教団が勝っているわ。でも、諜報部のみ、私たちが勝っているの。」

「それはメトエレがバカってことか？」

「そういうわけではないと思うけど、メトエレの成立自体がイレギュラーだからよ。」

「イレギュラー？」

「その点については説明はできないわ。あなたはあなたの任務をこなして？」

これ以上聞いても、ミシリアは答えてくれない、そう思いエルトは聞くのをやめた。

「今回の会議はエスカリーナ教会。一番侵入しやすい場所よ。警備はこの図面通りで。」

ベレトレが、見取り図を見る。

「この配置、なるほど・・・このルートから侵入させるわけですか。ですが、この侵入経路をふさぐ役が、エルトとオルベルティですか。」

「おお？戦闘か！熱くなるぜ！やってやろうぜ、エルト！」

「おいおい・・・いきなり戦闘か。」

落ち込み気味のエルトに対し、燃え上がるオルベルティだった。

「大丈夫。そこは後に増援が回る手はずになっているわ。それに、よっぽどなことがなければ戦闘にはならないわ。」

「増援？ですが、そうするとこの脱出経路があいてしましますが？」

見取り図には、一カ所だけ警備が手薄な場所がある。

計画の内容としては、ある一カ所をわざとあけて、そこから侵入させる。

会議場侵入後、侵入経路を封鎖し、捕縛に入る。会議場には、ミシリア他、諜報部、聖騎軍を配置。外回りには、少数精鋭を配置する。

精鋭を、侵入確認後、侵入経路封鎖に当てる。

ここで、エスカリーナ教会の特色が生きてくる。

エスカリーナ教会は、窓がないのである。

つまり、中に入れば扉以外からの脱出が不可能となるのだ。

ただ一カ所、天窓があるが、通常の間人ではそこまでたどり着くことは不可能だろう。

「あのさ、こんなわかりやすいことにひっかかるのか？」

明らかかなほど簡単で、わかりやすいトラップ。

これで釣れる魚であるメトエレとは一体どれだけバカなのだろう。

「ひっかかるんですよ。特にメトエレ隊長のゲフェスキーはね。」

「ベレトレ、その難しい名前の野郎は何なんだ？」

「まあ、覚える必要のないことですからね。とりあえず、自分の任務の内容だけは覚えてください。」

「へいへい。」

それからエルトは、見取り図を見て、ミシリアにいくつか質問した後、カフェを後にした。

「ここが、エスカリーナ教会・・・。」

実物を見ようと、エルトは教会に来た。

エスカリーナ教会は、王国派の居城、ディエルタ城の一角にある。

エリ・メア教団は、ディエルタ城の正反対にあるエリ・メア大聖堂が拠点となっている。だからといって、その教会にいかないと言ったわけではない。

「ここが、明日には・・・。」

エルトは、腰にかけられた二本のショートソードを見る。

「絶対に、死ぬわけにはいかないんだ・・・。絶対に・・・。」

エルトは胸元から何かを取り出した。

どうやらロケットのようだ。

「いつか必ず・・・。」

ロケットを開くと、写真が一枚。幼いエルトと、少女が写っていた。そしてエルトの父と思わ

れる人物。

威厳に満ちた、いかにも騎士といった風貌の男である。

「さてと、準備でもするか。」

体を急に反転させ、一步足を踏み出す。

「きゃっ！」

「おっと！」

後ろにいた、修道衣に身を包んだ二人組とぶつかった。

「大丈夫か？」

「ええ・・・大丈夫です。」

フードを深くかぶっているため、顔はわからないが、声から女であることはわかった。

「立てるか？ヴェルノ。」

相方が手を差し出す。

「ありがとう、リオン。」

その手をつかむと、女は立ち上がり砂を払った。

「すいませんでした。」

女は、頭を下げると、相方であろう人物と、エスカリーナ教会へと入っていった。

二人の後ろ姿を見送ると、エルトは、訓練するため、オルベルティを探しに宿舎へと歩いていった。

とても静かな夜だった。

そして綺麗な月。

エリ・メア教のシンボルは、月と太陽。

反目する二つのもの、重なることはない。でも、必ず対をなす。

太陽の輝きは、猛々しく、すべてに活力を与える。

月の輝きは、優しく、安らぎを与える。

今、エルトは月を見上げ、心を落ち着かせようとしていた。

「眠れねえのか？」

同室のオルベルティが声をかける。

「まあな。明日、命を落とす可能性だってあるわけだろ？」

「お前の腕なら、大丈夫だ。まして俺様がついてる。安心しろ。」

「そうだな。」

「でも、いろいろあるんだな。俺が思うに、会議なんかに命懸けで侵入してどうすんだ？」

「定期議会、聞いたことはあるだろ？」

「ああ。エリ・メア大聖堂で行われるあれだろ？難しい話してるやつ。」

「そう。でもあれは、国民へのアピールの場でもあるんだ。あの会議で勝ったほうが、政権を握るってもんらしい。」

「なるほど。で、その会議の相手の駒を知っておくというわけか。」

「ああ。」

いつもは疎ましく思うおっさんも、今日に関しては、かっこよく見えた。

「ちょっと夜風に当たってくる。」

「ああ。」

扉のノブを回して、部屋の外に出る。

「おい、いつもの夜の訓練はかまわないが、風邪だけはひくなよ。お前も戦力に入っているんだからよ。」

(気付いてたのかよ……。まったく……。)

「ああ。」

それだけ言い残すと、エルトは部屋を出た。

夜の宿舎は、静まりかえっていた。

普段は、夜うるさい、と思うが、今日に限っては静けさがつらかった。

「とりあえず、屋上でも行くか。」

空には雲一つなく、月と星が輝いていた。

ミシリアは、風呂から出て、髪を乾かしていた。

火照りをとるため、バルコニーに出る。

「綺麗な夜ね……。」

空を眺め、視線を街に向ける。街には明かり一つ灯っていない。

「懐かしいものね……。」

部屋に入ろうとしたとき、視界に人影が映った。

「あれは・・・エルト？」

屋上に一人たたずむのは間違いなくエルトだった。

「ベレトレ。」

「はい。」

ミシリアの背後から、バラの香りが漂う。

「最近のエルトの行動は？」

「やはり、夜になると、姿をくらますことが多いですね。基本トレーニングですが、たまに姿を見失うことがありまして・・・。」

「あなたの尾行をまく、か。」

「下町方面にいかれるとどうしても難しいですね。まして、エルトは顔が利くようなので、バーに入られればお手上げです。」

現状では、夜の徘徊は禁止されている。だが、バーに関しては、別段教団が禁止しているわけではない。

「酒屋ギルドからどれだけの寄付金が教団に送られているのやら・・・。」

ミシリアは大きくため息をつく。

「相当な額かと。調べる事ができないのが残念ですが。」

「ベレトレ、今日はもういいわ。休んで。」

「では、代替りの者を・・・。」

「それも、いい。休ませてあげて。」

「わかりました。それでは失礼します。」

ベレトレは足音もなく立ち去った。

ミシリアは鏡の前に座ると、髪を整え、ベレトレからもらった香水を軽く振りかけた。

「準備完了！ではでは・・・。」

ミシリアは部屋を出た。

「・・・。」

ロケットの中で笑う3人の人物。

「こんなところで何をしているの？」

突然声をかけられて、我に返ったエルトは顔を上げた。

「ミシリア・・・。」

「何をみてるの？」

ミシリアが、顔を近づける。

「な、なんでもないよ。」

ロケットのふたを閉じると、胸にしまう。

「何を隠したのかな？」

「何でもないって。」

「見抜いて差し上げましょう。」

ミシリアが、エルトに顔を近づける。

息が当たるくらいの距離だ。

赤い瞳がまっすぐエルトを見る。

口元にはうっすらと紅がひかれ、ほのかにバラの香りが漂う。

薄手の就寝衣は、体のラインを際立たせ、ミシリアが魅力的な女性であることを十分に意識さ

せる。

「明日の任務のこと考えてるわね？」

「当たり前だろ。」

エルトは、ミシリアの近距離攻撃に耐えきれず、顔を背ける。

「大丈夫よ、あなたは強いわ。」

「何でわかるんだよ。」

「毎晩のように自主トレーニングしているあなたをベレトレが見ているからね。」

「まったく・・・いい性格してるぜ。」

「ふふふ。それにしても気持ちのいい夜ね。風がとってもいいわ。」

ミシリアの赤い髪が風に踊る。

それに伴って、甘い香りが漂う。

「人を斬るのが怖いのか？それとも自分の命が危険だから？」

「違うな。自分の命なんて常に危険のようなものだったし、人を斬ったこともある・・・。」

「いつ？」

「昔、な。」

「そう、なの。」

満天の星空のもと、二人は街を見ていた。

「ミシリアは、なんで王国派に？しかも聖騎士なんて・・・。」

「・・・・・・・・。」

「話したくないことだったみたいだな。すまない。」

「あなたと大して変わらないわ。消されただけよ。」

「そうか・・・・。でも、奴らのしっぽは見えた。」

「ええ。後はつかむだけ。情報はすでに流してある。あとは、奴らがいつ侵入してくるか。」

「今日ってことはないのか？」

ミシリアはしばらく沈黙した。どうやら、ありとあらゆるパターンを考えているようだ。

「情報が漏れることはない・・・。漏れていた場合、そこが一番の問題点。でも、私の部隊は今日話した。情報も今日流した。可能性があれば・・・。」

難しい顔をして、ミシリアは黙り込んだ。

「ミシリア？」

「あ、ごめんなさい。考えすぎたわ。」

「肩こらないのか？そういう生き方。」

「肩もんでくれるの悪いわね～。」

ミシリアは、エルトに背中をむける。

「だから・・・・。」

「悪いわね～。」

「はあ・・・・。」

仕方なく、エルトはミシリアの肩をもむことになった。

「は～極楽ね～。」

「それはよろしゅうございました、お嬢様。」

「今の、ベレトレのまね？」

「そのつもり。」

「フフ、似てないわ。」

「そうか？」

肩をもみながら、エルトは、ミシリアの肩にのしかかるものを想像していた。

こんな華奢な体で、一体どれほどのものを背負っているのだろう。

「明日になれば、嫌でも戦わなきゃいけない。少しは、あんたの荷物を楽にできるかもな。」

「そうね・・・毎日肩もんでくれたら、相当楽だわ。」

「それは、ベレトレに頼め。喜んでやってくれそうだろ？」

「だから、悪いのよ。」

「そいえば、子供は誰が守るんだ？」

「入室後、奴らが侵入してくる前に避難させるわ。会議に潜入してきた。これだけで定期議会ではかなりの武器になる。」

子供が今回一番重要な存在になる。

もし殺されれば、手がかりを失うことになる。

だが、メトエレは暗殺や戦闘に関しては、かなり弱い。

それ故、暗殺の可能性はかなり低いと見ていた。

「やれやれ・・・。」

「なにかしら？」

「聞いた俺が言うのも何だけど、仕事の話やめないか？」

「・・・そうね。せっかくだし。」

「満天の星空で、今は夜で、男と女が二人きりのいい雰囲気。そんな場面で仕事の考え事してるようじゃ、もてないぞ。」

「言ってくれますわね・・・こう見えても、男性から毎日声がかかるんですが？」

「かかるからいいってもんじゃないんだな。こういう雰囲気の際はだなあ・・・。」

「あ！」

ミシリアが突然大きな声を上げた。

エルトは驚いて、肩から手を離す。

「学校からの定期連絡、今日来てないわ！みんな元気かな・・・。」

「だから、頭の中は仕事しかないのだったの！あ～あ、雰囲気ぶちこわしだよ。もういいや。んじゃ、そろそろ寝るな。」

エルトは、立ち上がると、ミシリアを置いて屋上を後にした。

「何かしら？私の仕事に対する態度に不満でもあるのかしら？」

一人残されたミシリアは、空を見上げたのだった。

「これより、定期議会对策会議を始めます。本題に入る前に、一つ、重要な情報があります。ついに我々は、教皇の犬共のしっぽをつかみました。」

エザリアは、机に座る重鎮達を見る。

重鎮達は、ローブを身にまとった初老の老人から、青年までさまざまである。

「誰だ・・・教皇様に逆らう馬鹿者共は・・・何を企んでいる？」

ゲフェスキーは、教会内部に侵入し、会議を見ていた。

侵入部隊は、全部で25名。ロイがつけた護衛は2人だ。

数が多すぎると見つかってしまう。それ故、最少人数できたのだ。

「ミシリア、彼女をここへ。」

奥にいたミシリアが、少女を連れて入室する。

「この少女が、奴らを見たというのか？」

「ええ。青い髪と赤い髪の子だと。」

その光景を見て、ゲフェスキーは口からよだれが出ていることにすら気がつかなかった。

「くふふふ、ふふふ。ロイ、ついにミスをしたようだな。ディリーターが正体を見られるとは・・・。いくら子供とはいえ、ふふふ。」

ゲフェスキーは、戻ってからの光景を思い浮かべると、発狂したい気持ちになった。

今まで涼しい顔して来たロイを、査問会にかけることができる。

そうすれば、奴は今までのようにでかい顔はできない。

教皇様に対する非礼の数々、すべて精算させてやらなければ。

「赤い髪と青い髪？今日、来ている奴らじゃないか・・・。どういうつもりだ？」

そんな疑問を持ちつつ、ゲフェスキーが見ている目の前で、会議が進んでいく。

「くせ者だ！」

突然、一人のローブをまとった男が扉を開けて会議室に入ってくる。

「みなさん！教会内に、多数のくせ者が！あそこにも！」

追って今度はローブをまとった女が入ってくると同時に、ゲフェスキーを指さす。

「なんだと？」

重鎮達は、立ち上がると、姫を守るように立つ。

（どういうことだ？こんな計画ではないはず・・・。多数？敵の数が多いというのか？増援？）

ミシリアは周囲を見渡す。

「ベレトレ！姫をお守りして！」

「はっ！」

ベレトレは、すぐさまエザリアのもとに駆け寄る。

その様子を確認した後、ミシリアは伏せさせていた兵に合図を送る。

「戦闘準備だ！」

あっという間に、教会内には王国派の兵が流れ込んできた。

「くっ！ひけ！やはり、罠か！黙って捕まるわけには・・・。」

ゲフェスキーの合図と共に、教会内にいたメトエレ達が、進入路目指して走る。

（かかった。ここまでは、計画通り。頼むわ、エルト、オルベルティ！）

「おい、教会内がずいぶんと騒がしくないか？」

緊張した面持ちでエルトはオルベルティに尋ねる。

「みたいだな……。始まったようだ。」

「始まったようだ、じゃねえだろ？任務は？いかないといけないんだろ？」

「ああ……。」

オルベルティは大きなあくびをすると、寝返りを打つ。

「行ってこい。俺は一眠りしてからいくよ。」

「なんだって？」

「だから、寝るって。」

「なんだそりゃ？寝るって、今どんな状況か……。」

「……。」

「もう寝たのか！？くっそ〜。」

エルトはオルベルティを置いて走り出す。

目指すは、防衛地点。

腰のショートソードを引き抜くと、両手に持つ。

（任務内容確認……。最善策としては、捕獲。だが、やむ終えない場合、負傷、または死亡させてもかまわない、か。）

防衛地点に到着した。

壁にもたれ、息を落ち着かせる。

「やっときたかよ……。」

「はっ？」

「遅いな。」

目の前にオルベルティがいる。

「おまえ、寝てたんじゃないのか？」

「なんのことやら……。」

「あのなあ、緊張をほぐしてくれるならくれるでもっといい方法ないのか？」

「まあ、細かい話はなしだ。きたぜ？」

出てきたメトエレの頭をつかむと、オルベルティは壁に思いっきりたたきつける。

メトエレは、壁に頭をめり込ませ、動かなくなった。

「よし……。捕獲成功。後は身を守るためだ。やばかったら殺せ。」

「そ、そんな余裕あるかよ！」

次いで出てきたメトエレとエルトは対峙している。

「がんばれよ〜。俺は、後、8人くらい相手にしなきゃいけないんだからな……。」

「わかってる！」

「げはあああああ！」

エルトのショートソードが、メトエレの体を切り裂いた。

「次！」

「ほう……。やるもんだな。そう来なくちゃよう！」

(どう考えても、おかしい。このタイミングで仕掛ける予定だったのか？それとも姫の命か？まして、この敵兵の数。多すぎる。20人は超えている。すでにこちらの情報が流れていたのか？いったい誰が……。)

ミシリアは、エザリアの方を見る。

エザリア自身、何が起きたのかわからず呆然としている。

(姫の命令ではない。では一体……。そもそも、この二人は……。)

ほんの一瞬だった。

ローブをまとった少年の髪の色が見えた。

「青い髪……？」

その声を聞いたのか、どうかはわからない。

その少年は、何かを振るった。

「きゃっ！」

ミシリアの近くで小さな悲鳴が聞こえた。

「しまった！狙いは……。」

振り返ったときには、そこに少女の姿はなかった。

エザリアのことに気をとられ、少しの間、少女への注意が緩慢になったタイミングを狙われた

少女は、吹き飛び壁に激突し、物言わぬ死体となっていた。

「きさまあああああああああ！」

剣を抜くと、少年に斬りかかる。

「させ……な……い。」

ミシリアの踏み込んだ足の数センチ前を、何かが切り裂いた。

「なに？」

「これが……私の……任務……。」

少年の隣にいた少女が、ただならぬ気配で言葉を発した。

「それは私とて同じこと！」

ミシリアは、二人を間合いに入れようと飛び込む。

「残念だけど、任務完了だ。」

ミシリアの剣が空を切る

「なに？」

見上げると、二人の体が天窓にむかっていく。

「ゲフェスキー、つかまれ。」

追い詰められて逃げ場を失っていたゲフェスキーに、少年はムチを投げる。

「そういうことか！」

ミシリアは、すぐさま外へと向かう。

扉を開けて、屋根の上で戦闘をしている二人を捜す。

「エルト、オルベルティ！天窓の方に敵が逃げた。そいつらは絶対に逃がさないで！」

「なんだって？」

みると、人影が3つ、天窓を突き破り飛び出してきた。

「かなり無茶な状況だろ？予定より数が多すぎる！メトエレの総攻撃か？」

エルトの悲鳴に近い声上がる。

実際、当初予定していた人数とは比にならないくらいの増援が、教会に押し寄せてきている。

「私もすぐに向かう！」

ミシリアは教会の中にはいると、階段を駆け上がる。

途中、少女の死体が目に入った。

頭と腹部を弾かれ、壁に激突していた。

「また・・・また私は守れなかったというのか！」

拳を強く握りしめると、ミシリアは階段を駆け上がった。

「オルベルティ！どうすんだよ！逃げられちまうぞ！」

「んなこと言われたって、数が予定の倍だぞ・・・奴ら何を企んでやがる。それにこいつら、メトエレじゃない一般人も交じってやがる！」

「くっそ！」

エルトは対峙していたメトエレをオルベルティめがけて蹴り飛ばす。

「後は頼む！」

「おいこら！無茶言うなっつての！お前一人で3人も相手にできるわけないだろ！」

オルベルティの制止を無視し、エルトは走る。

（本当に、3人に挑むのか？）

冷静な頭が自分に問いかける。

「知るかよ・・・。」

「大丈夫。私もいますから。」

いつからいたのだろうか。

気がつくとも横にベレトレがいた。

（なるほど・・・俺にはまだ早い、か。）

「どっちをやるんだ？」

「私はディリーターと思われる二人を。私用もありますし。」

「おし。何とかって言う名前のややこしい方は俺が相手だ！」

エルトとベレトレは、天窓から現れた3人のもとへと走った。

ヘーゲルは、アジトで優雅な午後を送っていた。

「うまくやれるかしらね・・・。」

「大丈夫だろ？」

「にしても、今回の任務でメトエレは壊滅するわね。」

「狙いがそれだとは知らず、ゲフェスキーも哀れな奴だ。」

デファイは、湯を沸かし、コーヒー豆をひく。

「メトエレの壊滅、国王派を襲撃、シナリオ通りって訳か。」

「そうね・・・。」

「ごふっ！」

デファイが倒れた。

「ふう・・・懲りない人ね・・・。」

「今回は・・・完璧だと思ったのに・・・。」

今日もまた、デファイブレンドによる犠牲者が出たのだった。

作戦前日、ロイがアジトに戻ったのは、深夜遅くだった。

「今戻った。」

「おかえりなさい！遅かったですね？大丈夫ですか？」

ヴェルノが、玄関で迎えてくれた。

「ああ。」

ヴェルノの頭をなげると、居間へ向かう。

「戻ったぞ。」

「遅いじゃな〜い。夜遊びはほどほどにきなさいよ？」

ロイは、大きくため息をつくと、軽くのびをする。

「今回の任務、リオン、ヴェルノに任せてもらうことにする。」

「よっしゃ！任せろってんだ！」

「調子に乗らないの！」

「デファイ、説明は頼んだ。少し休む。」

「心得た。」

デファイ、ヴェルノ、リオンはそのまま会議に入る。

その様子を見つつ、ロイは自分の部屋の扉を開けて、中に入る。

「ようこそ～。さあ、ロイ様、服を脱ぎましょうね～？」

「・・・はあ。ヘーゲル、俺の選択間違っているのか？」

いつの間にか先回りしていたヘーゲルがベッドの上で横になっていた。

「そうね・・・間違ってるわね。こんないい女をまたせるな・ん・て。罪と言うしかないわ。」

「あの二人にとっては厳しいことをやらせることになってしまった。」

「うふ。大丈夫よ。あの子達、確かに一人では弱いわ。でも二人なら、ね。」

「それならいいんだが・・・。」

ロイは、そっと扉を開け、会議中の二人をみる。

偶然かどうかわからないが、二人と視線があう。

優しく微笑むと、ロイは扉を閉めた。

「二人だけだと厳しいかもしれないな。」

「どうして？」

「向こうは少数とはいえ、精鋭がそろっている。ミシリア、オルベルティ、ベレトレ。いくら何でも厳しい。」

「あら？ヴェルノが本気になれば、その程度の軍勢、楽に逃げれるわ。」

「本気になればな・・・。」

ヴェルノには、未だ克服できていない問題があった。

「現状まともに動けるディリターは5人だけだ。養成は間に合っていない。誰一人として、失いたくはない・・・。」

「スピカ、みたいなのはもう十分？」

「ああ・・・。二度とごめんだ・・・。」

ロイは、ロケットをあける。

そこには、照れくさそうに立つ自分と腕を組んで笑う女性がいる。

「ヴェルノは、俺を恨むだろうか・・・。」

「ロイ、あなたを恨むわけがないわ。それに、リオンも含めてだけど、知らなきゃいけない。ディリターが何か、どれだけのものを背負っているのかをね。」

ロイは、額の前で指をくみ、祈る。

「エリ・メアにでも祈っているのかしら？」

「バカ言ってるんじゃない。そんなものに祈るぐらいなら、祈るなんてことはしない。」

「あらら、私たちはどこの部隊なのかしら？」

ロイは、窓から、夜の街をみる。

明日、運命のシナリオの1ページ目が開かれる。

派手にガラスを突き破り、3人は教会という名の檻から飛び出した。

「やっば、しゃばの空気はうまいね～。」

「・・・。」

いつもなら戒めるヴェルノの声が聞こえない。

(当たり前だよな……。どう考えてもきついに決まってる。)

「そんじゃ、俺たちはここで。」

リオンは無言のヴェルノをつれて帰ろうとした。

「ちょっとまってくれ！私は戦闘員ではないんだぞ？」

「ん？んじゃつかまれば？命まで取らないでしょ？」

「そ、そんなことしたら教皇様にどう思われるか！」

「そんなこと俺の知ったことじゃない。まして、俺たちは顔を見られたらまずいんだ。今回は仮面もない。わかってもらえるかな？」

「だが！」

「うおおおおおおおおお！」

叫び声と共に、空中から青年が斬りかかる。

「お客さんだぜ？」

「ちい！」

リオンは難なく交わし、ゲフェスキーは反撃に突きを放った。

「よっと！」

エルトも軽々交わす。

「やるじゃん。それなら大丈夫でしょ？それじゃこれで。行くよ、ヴェルノ。」

「簡単にいくかしら？」

リオンが話している間、ベレトレから一瞬たりともヴェルノは視線を外さない。

「ん～せっかくだからここで相手の戦力、削っとくか？」

ティリーレをしならせ、リオンはベレトレをにらむ。

「いくぜ？」

「おもしろい……。」

ベレトレは剣を抜く。

(足場の悪いここならば、接近されなければ、俺には有利だ。)

ベレトレとの間合いに気を遣いながら、リオンは攻撃を仕掛ける。

「もの足りませんね……。」

リオンの変幻自在なムチの攻撃を、軽々と交わす。

「まじかよ……。」

「そろそろ行きますよ？」

ベレトレが投げナイフを手に取る。

「そこだ……。」

ムチの間を通り抜け、ナイフはリオンの右肩目指して飛ぶ。

攻撃に集中しすぎていたせいか、リオンの回避が若干遅れた。

(まずい！)

ナイフが肩に当たるぎりぎりのところで、何かに絡め取られた。

「リオン、そろそろやめておきなよ。」

アンセスがリオンを守った。

「私たちの任務は、完了している。逃走が優先よ。」

「確かに、こいつは手に負えないなあ。」

完全に実力的に負けている。

まともにやれば、簡単に殺される。

この狭い足場で自分のムチを軽々交わし、反撃も的確に行える。

実力が違いすぎる。

「簡単に逃がすと思っているのですか？」

「どうかな？」

「それじゃ、アジトで。」

「は？」

「別々に逃げた方が、まける可能性が高いわ。」

「おいおい、なにを……。」

「お願い……。」

顔は見えなくても、ヴェルノがつらそうなのはわかった。

「わかった。必ず、な。」

「ええ。」

リオンはティリーレをベレトレめがけて振るう。

それと同時に、二人は別方向へと走り出す。

「……。後は頼みました。」

ベレトレは、鞭を振るわなかった方を追いかける。

どう考えても、鞭を持つ者を追いかけるのはかなり危険である。

「こりゃ、援軍は期待できないな……。」

オルベルティもミシリアも、敵の増援に時間を食っているようだ。

「おっさん、死んでもしらないぞ？降参するならやめてもいいぜ？」

「何をバカなことを！」

「仕方ないなあ……いきなり奥の手からいかしてもらうぜ！」

エルトは、ショートソードをしまい、腰にかけていたブロードソードを両手で持つ。

(あれは……？)

目の前の敵を蹴散らし、ミシリアはエルトのもとへと走る。

(確か、父親の形見とか言ってた……。使えないんじゃ？)

「いくぜ！？」

助走をつけると、エルトは飛び上がった。

(空中では反撃回避はほぼ不可能。だが、この悪い足場、では反撃の方が危険。受けた後、バランスが崩れたところで勝負か。あの大剣をいかに、受け流すか……。)

ゲフェスキーは両手で剣を持つと、膝を曲げ、受け流しの体勢をとる。

「でやあああああああ！」

エルトの剣と、ゲフェスキーの剣が近づき、触れる。

「勝負だ！」

受け流しに入ったゲフェスキーの視界には、ブロードソードしかなかった。

(ブロードソードは囷！？大剣による一撃にかけると見せかけて、鏢迫り合いに集中させる。そして、鏢迫り合いになる瞬間にブロードソードから手を離し、ショートソードで攻撃する。)

エルトの頭を使った攻撃に、ミシリアは感心する。

「みたか……俺の奥義！」

「ネーミングのセンスはないのね。でも、見事よ。」

「ぐおおおお！」

貴様らを逃がすわけにはいかん！)

人混みを交わしながら、ヴェルノは走る。

(簡単に振り切れない……。ベレトレ……。)

背後から、離れずについてくる男に、ヴェルノは恐怖感を抱き始めていた。

「ナオ！どこにいやがる！」

一人の男が、怒鳴り声を上げて、家の中に入ってくる。

ナオと呼ばれた少女は、クローゼットの中に隠れ、あやとりをして気を落ち着かせる。

「どこにいきやがった！？お前のせいで取引がパアになったじゃねえか！」

「くっ！」

一瞬、過去を思い出す。

震え始める手を、ぎゅっと握って押さえ込む。

「私は……。ディリター……。任務をこなす……。それが仕事……。震えない……。ま
けない……。」

正直に言って、怖い。

一人で、ベレトレと戦えるのか。

勝てるわけがない。

リオンですら軽くあしらわれた。

そして、捕まることは、死を意味する。

あの時のように、助けは来ない。

「乗り越えて……みせる。」

曲がり角を曲がり、細い路地を抜け、大通りに出る。

「逃がすか！」

ベレトレも大通りに出る。

「きゃっ！」

男の平手打ちに、ナオは吹っ飛ぶ。

「このやろう……何で相手しなかったんだ？お前が相手しないからお得意さん、かえっちまっただろう？せっかく育ててやったのによ。」

「ご……ごめんなさい……。」

「ごめんじゃねえんだよ！お前なんかそれ以外何の役にもたたねえじゃねえかよ！」

男は、ナオを足蹴にする。

「た……助けて……。」

声にならない声を上げる。

「誰か……。」

誰かに届くこともなく、その願いはたたれた。

(あの子ども怖かったはず……)

先ほどの少女と自分を重ね合わせて見ていた。

目の前にある事態に対し、何もできずにいる。

自分は助けてもらえた。

彼女は、死んだ。

その差は、一体……。

運命だとでも言うのだろうか。

(私はロイ様が助けてくれた。同じ境遇だったのに、彼女は死んだ……)

震えることしかできない自分、そんな自分に誰かを助けることなんてできたのだろうか。

今回の任務も、こなししたのはリオン。

自分は、隠れて震えていただけ。

(救えない……消せない……役に立たない……)

あふれそうになる涙をぐっところえて、ヴェルノは走る。

前方に見える小さな背中に照準を合わせて、ベレトレは投げナイフを構える。

「くっ！人が多すぎる……。」

ナイフを手に持ったまま走る。

「殺すことはできないな……絶対に生け捕る。」

(何でついてこれるの？うかつだった……)

ヴェルノは、冷静さを失っていた。

まさか、あの少女がいるとは思わなかった。

まして彼女がターゲットだったなんて。

リオンがやらなければ、自分は絶対にできなかった。

「覚悟・・・していたのに・・・。」

最後の瞬間の少女の顔が浮かぶ。

「私は・・・私は・・・。」

ほんの一瞬だった。

別のことを考えていた瞬間、目の前に子供が飛び出してきた。

「くっ！」

ぎりぎりのところで交わしたがバランスを崩す。

「そこだ！」

ベレトレが放った投げナイフを、一回転して交わすと、裏路地へと逃げ込む。

逃げ込んだ先の裏路地は、小さな空き地になっていて、行き止まりになっていた。

とりあえず、柱の裏に身を潜ませる。

「ふう・・・。」

一息つくと、恐怖と不安が心を支配していく。

「痛っ！」

何となく触れた足首に激痛が走った。

(さっき交わしたときにひねったのかな？通常には支障が出ないだろうけど、激しい動きには痛みが伴う・・・。)

絶望的な状況が、さらに絶望的になった。

「！」

広場にベレトレが現れる。

「どこにいる！ナオ！でてこい！」

男は怒鳴りながら周囲を見回す。

その後ろ手には、包丁が握られていた。

ナオは、養父の怒りが静まるのをじっと隠れて待つ。

「今すぐ出てきて、相手してれば、許してやる！」

最初に引き取られてきたときは、こんなじゃなかった。

養父もここまで荒れていなかった。

事業に失敗してからだった。

「これが最後の忠告だ！出てこい！」

「怖い・・・。」

柱の陰に隠れ、膝を抱え、震える自分。

あの頃から何も変わっていない。

「隠れても無駄ですよ？」

ベレトレが、広場に足を踏み入れる。

足音もなく、気配のみが近づいてくる。

「降伏して出てれば、命は取りませんよ。」

ベレトレの声は、とても冷徹で、どこか狂気じみていた。

「これが最後の忠告です。抵抗するなら、殺しますよ？」

(怖い・・・助けて・・・ロイ様・・・リオン・・・)

仲間の名を心の中で唱えても、隣にはいない。

自分が突き放した。

自分の弱さを見せたくなかった。

幻滅されたくなかった。

震えることしかできない自分の無力さが、悔しかった。

「出てこない気か・・・わかったぞお！」

養父は狂気じみた叫び声を上げた。

「殺してやる・・・殺してやるよ！」

養父は狂った笑い声を上げ始めた。

「お前のせいで取引は失敗だ！完全に俺は借金まみれだ。お前のせいだ・・・お前がいるから・・・。」

近くの花瓶が吹っ飛んで砕けた。

「絶対に殺してやる！」

ナオは、クローゼットの中に隠れて、ひたすら祈る。

「エリ・メア様、助けてください。エリ・メア様・・・。」

「説得には応じてくれませんか・・・。」

どこか嬉しそうにベレトレが話す。

「殺してやる！いや・・・殺すのはまずいな・・・だが、腕の一本や二本なら問題ないだろ・・・。」

(助けて・・・)

もはや祈る神を持たないヴェルノには、誰に助けを求めればいいのかすらわからない。

「ふはははははははは！」

嫌な予感がして、柱から飛び出した。

振り返ると、もといた場所にナイフが二本刺さっていた。

「やっとあえましたね、ディリーター・・・。」

目の前に立つ長髪の男は、狂気に満ちた目をしていて。

「どこだあああああ！」

養父は、クローゼットを通り過ぎ、隣の部屋へと向かう。

「よかった・・・。」

自分の前を通り過ぎ、ほっと一息つく。

「みつけたぞ・・・。」

顔を上げると、そこには狂ったかのように笑い転げる養父がいた。

「殺してやる！」

立てない。言葉も出ない。

「・・・。」

養父が包丁を振りかぶる。」

「げばふ！」

ナオの瞳に映ったのは、一人の青年の背中だった。

養父の振りかぶった手から包丁が落ち、床に刺さる。

養父の顔は床に転がり、血が辺りを埋め尽くす。

「大丈夫か？」

「こ～ら、ロイ！そんな言い方したら怖がるでしょ？こういうときは、スピカお姉さんに任せなさい！」

金髪のきらびやかな衣装を着たお姉さんが、かがむ。

「あなた、お名前は？」

「ナオ……。」

震える声でそれだけしぼりだした。

「ナオちゃんね……。かわいい～！」

スピカは、ナオを抱きしめる。

「大丈夫よ……。もう何も怖くないわ。」

「…………。」

ナオの瞳から涙が流れた。

「怖くないよ。もう大丈夫だから。」

「うん！……うん！」

「いい子ね。」

スピカはナオの頭を優しく撫でる。

「ナオ。」

ぶっきらぼうな青年が声をかける。

でも、怖くなかった。そういう青年だ、なぜかわかった。

「共に来るか？」

「うん！」

迷いはなかった。

まるでそうなるのが必然のように。

「さあ、行こうか？」

スピカがナオの左手を握る。

「おい、ロイ。何してんだ？さっさと右手を握れ。」

「なんでだ？」

「なんでだ？てめえ、それでも父親か？」

「父親？」

「私が母親、ナオが子供。てめえは父親だろ？それとも何か？やることやったら私は用無しか？あ～あ、昨日の夜はあんなに激しく求め合ったのに。男って淡泊よね～。まあ、確かにタンパク質って言えばタンパク質だけど。」

「誤解を生むようなリアルなことを言うな！」

ロイはナオの手を握る。

「さあ、いこうか。」

初めて、人の優しさに触れた気がした。

これが走馬燈というものなのだろうか。

(最後に、懐かしい思い出がみえてよかったな……。リオン、出てこなかったな。)

いつも自分の隣にいる少年を思い出す。

まともに動くことすらできない。どう考えてもこの男には勝てない。

それならば、ディリーターとしてすべきことはただ一つ。

「さあ、さあ！さあ！どうするんだ？貴様らには過去に大きな借りがあるからな……。」

「ロイ様、デファイ、ヘーゲル……。リオン……。ごめん。」

ヴェルノはアンセスを装着する。

「まずは、左腕からだ！」

ベレトレの剣が振り下ろされる。

「つつ！」

恐怖に瞳を閉じる。

だが、痛みは来なかった。

「目を開けろ！ばか！」

「え？」

目を開けると、そこには少年の背中があった。

フード部分が破れ、顔をさらしてしまっている。

「早く、いけ！時間は稼ぐ。」

「リオン？」

「その足じゃまともに戦えないだろ！？」

「どうして……。」

「いいからいけ！」

いつもそうだった。

自分が落ち込んだり、怪我をするとリオンは気がついてくれる。

なぜかと問えば、相方だからな、と笑ってくれた。

「早く！」

リオンの左手から赤い滴が流れるのが見えた。

ヴェルノへの斬撃を防ぐため、無理矢理なタイミングで飛び込み、負傷したのだ。

「リオン……。」

「いいからここは俺に任せろ。」

リオンが、時間を稼ぐためにティリーレを振るう。

ベレトレは交わすと同時に逃げるヴェルノにナイフを投げる。

「やらせるか！」

痛む利き腕を我慢して、ナイフをたたき落とす。

「今回は貴様で許してやろう！」

ベレトレに、接近されてしまう。

近接戦闘では、圧倒的にリオンは不利だ。

(何とか間合いを広げないと……。)

ティリーレを操り、ベレトレとの距離をあげようとするが、そんなに甘い相手ではない。

「ほら、ほら、ほら！フッフ、フハハハ！うまく交わさないと刺さってしまいますよ？」

弱者をいたぶるかのようなベレトレの剣に対し、リオンは交わすので精一杯だった。

「そろそろ遊びは終わりにしましょうか？貴様らが行ってきた非道の数々……。そして、この

憎しみ……。」

ベレトレの気配が消えた。

視界に入っているのに気配がない。

「精算してもらいます！」

「なんだ!？」

ベレトレが制止しているように見える。

だが、近づいてくる。

(錯覚か?)

全く動きがないにもかかわらず、ベレトレが距離を詰めてくる。

（この場所があれば、乗り越えられる気がする。リオンと二人なら、震えないよ。怖くないよ・・・。）

ヴェルノは、安らぎに満たされ、安息を手に入れたのだった。

「うまくいったようだな・・・。」

「ああ。」

ヴェルノの部屋の扉に張り付き、聞き耳を立てている大人3人がいる。

「これにて、一件落着ね。」

物音を立てないように3人は扉から離れると、いすに座った。

「なあ、ロイ。あの二人が隠し事してるの、いつから気がついてたんだ？」

「・・・そうだな。確信を持ったのは、影の殊勲者デファイ、お前のおかげだ。」

「リオンの救出など当たり前のことだが？」

「いや、以前お前の入れたブレンドを、毒味といってリオンが飲んだんだ。」

「そしたら？」

「すべて話してくれたよ。自白効果があったらしいな。」

「へえ？ そうなの。デファイ、そのブレンドの作り方覚えてる？」

「ヘーゲル、何に使うんだ？」

ロイが恐る恐る尋ねる。

「いろいろ自白させてやりたい奴がいるのよ。」

ロイにウィンクしたヘーゲルが悪戯っぽく笑みを浮かべる。

「それか、精力増強効果のあるブレンドとか？」

「おいおいおい・・・。そんな都合のいい物があると思ってるのか？」

「あらら、残念ね。」

「どこだああああああ！」

養父は、クローゼットを通り過ぎ、隣の部屋へと向かう。

「よかった・・・。」

自分の前を通り過ぎ、ほっと一息つく。

「みつけたぞ・・・。」

顔を上げると、そこには狂ったかのように笑い転げる養父がいた。

「殺してやる！」

「大丈夫。震えたらだめ・・・。怖くなんか・・・ない！」

あの少女にはなかったものを自分が持っていることに気がついた。

最後まで一人だった少女と自分の違い。

それは自分で手に入れたものではなかった。

でも、自分にとって一番大切なものになった。

「私は、一人じゃない。仲間がいて、リオンがいて、絶対に助けに来てくれる！」

養父が包丁を振りかぶる。

「げばふ！」

ナオの瞳に映ったのは、一人の少年の背中だった。
養父の振りかぶった手から包丁が落ち、床に刺さる。
養父の顔は床に転がり、血が辺りを埋め尽くす。

「ヴェルノ、大丈夫か？」

そこには相方の少年がいた。

「リオン！遅いよ！」

「無茶言うなよ。」

苦笑する少年の胸に飛び込む。

「待ってたよ。怖かったけど、リオンが来てくれるって思えば、我慢できた！」

「よし、帰ろうか？」

「だめ。」

「なんで？」

「もう少しこのまま。」

「わかったよ。」

少年は優しく頭を撫でてくれる。きっとこの先もずっと……。